

高校3年生の「英語表現Ⅱ」の授業実践

～「結ぶ・繋がる」を教室に～

中尾 愛（茨城県立水海道第一高等学校英語科教諭）

1. はじめに

筆者は現在茨城県立水海道第一高等学校で高校3年生と日々学ぶものである。今年度は「コミュニケーション英語Ⅲ」を週4時間1クラス、「英語表現Ⅱ」を週3時間4クラス担当している。担当授業のほとんどが「英語表現Ⅱ」であるため、昨年の4月以降は「英語表現Ⅱ」の実践について調べたり考えたりする機会に恵まれた。

2. 問題意識の所在

「英語表現Ⅱ」では2年次の前期には教科書を終え、それ以降は問題演習を行っているとのことであった。生徒たちは文法問題集を自宅で解いてきて、授業の中で教師が一問一問解説していくというものだった。問題文は一文のみで、文中にカッコがあり、その空欄に相応しい答えを4つの選択肢から選んで答える。大学入試で必要だからと言っても、問題集を授業で解いていくだけではひどく味気ない。乱暴に言ってしまえば、解説付きの解答書を渡して「家で丸付けまでやってきなさい」で済んでしまう。一人で完結できることを教室でわざわざやる必要があるのか。もっと生徒たちの思考を刺激したり、自己表現に繋げたりするような授業にできないだろうかと授業開き早々に考えるようになった。

3. 授業の流れ

そこで、授業の形式を「一問一問生徒に当てて答えさせる、間違えていたら教師が解説する」という従来の方法を取らず、生徒たちに教壇に立ってもらってクラスメイトに解説し、必要ならば教師が補足説明するという方法を取ることにした。また、生徒が前に来て説明する際に、問題に関するトピックで、簡単な英語でのやりとりを筆者と挑戦してもらうことにした。その後、生徒たちそれぞれにその時間に学んだ文法や構文を使った「英借文」を書かせる。このように小さなユニットを組み合わせることで1時間の授業を構成することにした。

授業の流れは以下の通りである。

- (1) Warm-Up
- (2) Review（前回の生徒の疑問・生徒による「英借文」をスライドで共有）
- (3) 今日の範囲の確認、グループ分け
- (4) グループ内で担当箇所の確認
- (5) それぞれの代表者が前に来て解説・教師とのやりとり
- (6) 「英借文」を作り、教師に提出

以上の授業実践については『語研ジャーナル 第21号』（語学教育研究所編、2022）に詳細を発表した。本論考では、この授業を通して行ったパフォーマンステストに関して詳述し

たい。

4. パフォーマンステストの概要

筆者は 2022 年 8 月 10 日に茨城県指導法研究委員会が主催した令和 4 年度第 1 回研修会「新課程における授業展開の工夫～日々の授業を少し変えてみよう～」に出席した。授業方法を変えて手応えを感じていたものの、音声面でのやりとりや生徒たちの発表活動に何かヒントが得られないか…と藁をもすがる気持ちで参加したのである。講師の津久井貴之氏（群馬大学）が様々なアイデアを惜しみなく共有してくださる中で、「これは自分たちの生徒が興味をもって取り組むだろう」という確信を抱くものがあつた。それは大学入試を用いたパフォーマンステストだ。さっそく津久井氏のご許可をいただき氏のアイデアを実際の授業で実践してみることにした。課題は 2017 年度の一橋大学の前期入試問題をアレンジしたものである。以下に実際の入試問題とパフォーマンステスト用にアレンジしたものを掲載する。

<実際の入試問題>

You have been dating your partner for three years. Last week was your birthday, and your partner completely forgot about it. He/she did not buy you a present, telephone you, or even say, "Happy birthday." Write a letter to your partner explaining how disappointed you feel.

<パフォーマンステスト用にアレンジしたもの>

You have been dating your partner for three years. Last week was your birthday, and your partner completely forgot about it. She or he did not buy you a present, telephone you, or even say, "Happy birthday." Send a voice message to your partner explaining how disappointed you feel.

3年間お付き合いしているパートナーにすっかり誕生日を忘れられてしまい、がっかりしている旨を彼/彼女にボイスメッセージで伝える、という課題である。実際の入試問題を変えている点が下線部の部分だ。単なるライティング問題ではなく、音声で評価されるという点は、日頃受験問題ばかり問いている生徒たちには良い刺激になるだろうと考えた。

5. 教員の準備

パフォーマンステストを実施するにあたって、生徒たちが過剰な負担を感じることなく、適切な段階を踏んで自信をもって発表に臨めるように、以下の手順で生徒たちの指導にあたった。

(1) 教員自身が課題をやってみる

まず何よりも教員自身がその課題に取り組み、課題の難易度が目の前の生徒に適切なものか判断するべきだ。また、実際に自分で書いた原稿を読み上げ、録音し、時間を計ることで、生徒に課す字数の指定や制限時間に関して適切に設定することができる。この過程で、私は本校の生徒たちに「60秒以内で」、「100ワード以上、140ワード以内で」とい

う制限をすることにした。

(2) 生徒に提示するモデルの作成

生徒に言語活動をさせる際に、どのようなものが高い評価を得られるのか生徒たち自身が自分で汲み取る事ができるように、グッドモデルを提示することが大事である。また、良いモデルは複数あった方が生徒に参考になるであろう。そこで、本校に勤務しているALTの先生方2名と同じ授業を担当している同僚の先生1名にお願いし、モデルを作ってもらった。私自身も工程(1)にて作ったネイティブチェック済みのものを録音したので、合計4つのモデルが完成した。以下に筆者の作ったモデルとALT1名のモデルの計2例を掲載する。

① 筆者作成モデル

Hi Alex. It's Ai. You said you've been busy with your science report, so how have you been? Well...I hate to admit it, but you forgot my birthday. I feel like an idiot because I was waiting all this time to hear from you to see if you had any surprises for me. I'm so disappointed that I can't even think about anything else. We promised we'll continue to celebrate each other's birthdays together when we started to hang out. I'm feeling very betrayed. I believed you were the best partner for me, but I guess not. Anyway, I need to talk about the future of our relationship. Please call me back soon.

② ALT 作成モデル

Hey Ethan! It's me, Ryan. I hope your day is going alright. So, I know you're at work, but something has been bothering me, so I thought I would give you a call. Yesterday was my birthday, and I know you've been really busy, but we made plans to have dinner, right? I made reservations at the fancy restaurant down the street, and I was there on time. I waited for you there for an hour, but you weren't responding to my texts or calls. It was really embarrassing... It's ok if you were busy, but I deserve to know if you can't make it to things like this. Anyway, we can talk about it when you get home. I'm mad, but I love you. Ok, see you soon. Bye.

読み比べてみると分かるが、ふたつのメッセージには構成や内容に共通点と相違点がある。簡単な挨拶から始まり、パートナーに誕生日を忘れられ、ひどく落ち込んでいるということを両者とも伝えている。誕生日当日に何をしていたかについても伝えており、最後にはパートナーにこのメッセージを受けた後にしてほしいことを述べていることも同じである。

対して、①のモデルは自分がいかに絶望しているかを切々と伝え、別れを考えていることをそれとなく匂わせているが、②のモデルは怒りを感じているがそれでもきみのことが大好きだ、というふたりの関係を維持させたい気持ちが込められていることが分かる。また、当日予約していたレストランで、ずっとひとりきりで待っていてとても恥ずかしかった、というその場の状況を具体的に伝えていて、情景が鮮明に浮かぶようなメッセージになっている。

紙面の関係上全てのモデルをここに記載することはできないが、もう2つのモデルもそれぞれ内容に個性が光るものであった。内容自体に正解はないが、最低限どのような情報が含まれていればいいのか理解させるためにも、また単純により多くの英文に触れるためにも、4つのモデルを示す事ができたのはよかったと思う。

(3) 実施要項の作成

生徒たちにパフォーマンステストの課題や意義を理解してもらうためのハンドアウトを作った。評価の基準・実施日時・テストの実施方法について詳細に記載し、説明するための補足資料とした。生徒たちが不必要に不安を感じないように、またテスト実施に関して具体的なイメージが持てるように言葉を尽くした。

6. 指導手順

前章で述べた教員の準備を終えたところで、実際の指導に移る。指導手順は以下のとおりである。

授業回数	指導内容	留意事項
第1時限目	実施要項配布、課題や評価基準等の提示 モデルの提示	・課題に取り組む意義を実感させる。
第2～6時限目 (各授業時の最後の10分間)	生徒が実際に原稿を書き、完成させる。	・Writing作業に当てる。 (計40分)
第7・8時限目 (各授業時の最後の10分間)	教師が添削したものを返却し、リライトさせる。	・リライト作業に充てる。 (計20分)
第9・10時限目	実際に声に出して読む練習。実際に教員が一人ひとりに発音のフィードバックをする。 各自のスマートフォンで自らの音声を録音させ、自分の発音を聞かせる。	・あくまでも発話で評価されることを意識させる。 ・自宅でも練習してくるよう に発音のポイントを伝え、 励ます。
第11時限目	テスト・振り返り	・一人ひとりの発話を録音しておく。
第12時限目	生徒たちの Good Models の共有	

7. 生徒たちの反応

これまで生徒たちは受験問題を解くばかりで、スピーキングに重点を置いた表現活動やパフォーマンステストを久しくやってこなかったため、「やりたくない」というような否定的な声があがるかもしれないという不安があったが、おおむね好意的に課題を受け取ってもらえたように感じた。教員たちのモデルがそれぞれ興味深かったようで、「もう一度聞きたい」と言う生徒も居て、改めて「生徒に挑戦してほしいことはまず教員が挑戦してみせること」の重要性を実感した。

また、実際に書く作業は毎回の授業の最後の時間に少しずつ取ることで、自宅での受験勉強を逼迫することのないようにした。授業内で完結できる担保があれば、生徒から不満は沸かず、周囲の仲間たちが同じタスクに取り組んでいることを感じることで課題に前向きに

取り組めると見込んでのことである。



①生徒たちに教員のモデル原稿を見せ、音声を聞かせたときの様子。「こわ〜い」「かっこいい！」など口々につぶやく生徒たち。



②授業最後の Writing 作業中の様子。一人でもくもくと書き進める生徒も居れば、周りと言葉をかわしながらゆっくり書き進める生徒も。

8. パフォーマンステストの実施

課題の提示をしてから 11 時限目の授業内でパフォーマンステストを実施した。教室の近くの小スペースに対面で机を設置して、一人ずつそこに来て教員の前で発表してもらうという形をとった。

9. 評価

前もって生徒たちには以下の評価基準を示していた。

観点/ 得点	A(7点)	B(5点)	C(3点)
正しさ	発音・文法・表現がほぼ適切である	発音・文法・表現に、ミスはあるが伝わる	ミスはあっても伝えようとしている(ミス4個以上)
流暢さ	全体を通して英語らしいリズムで話している。情感たっぷりに読めている	所々リズムに違和感がある。ただ文を読み上げているだけで、感情が入っていない	拙い。日本語のイントネーションになってしまっている
内容	オリジナリティがあり、興味深い内容。聞いていて飽きない完成度になっている	面白いが展開やフレーズがありきたりでユニークさに欠ける。表現が曖昧で具体性が足りない	語数が足りていない。時間が大幅に余ってしまう

10. 成果と課題

10 時間に渡って少しずつ準備を重ねてきたため、生徒たちは過度な負担を感じることなく課題に取り組めたようだった。仲間と原稿を見せ合いフィードバックをし合ったり、何度も自分のスマートフォンに音声を吹き込んで自分の声を客観視して…を繰り返したりと、積極的に課題に向き合う姿勢があり、この学習プロセスで自分自身と向き合う時間を作れたという手応えがあった。もちろん、実施を終えてから反省することも多く、いかにそれをまとめたい。

(1) 評価基準の曖昧性

1 時間に 40 名もの生徒を次々に評価するために上記のルーブリックを用意したのだが、評価基準として曖昧で具体性に欠けている。学習指導横領の評価の観点である「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理すべきであった。上記の評価ルーブリックを用いると、「知識・技能」面での評価が重い一方で、「主体的に取り組む態度」は一切見とることができない。せつかく一度生徒に書かせたものを添削し、リライトさせる指導手順を踏んだのだから、そこで生徒がどれだけ最初の原稿を改良し、より良い作品に昇華しようと工夫したかを見とることができたはずであった。

(2) モデルの提示法

4つのモデルを提示したことで、解答内容の多様さを見せることができた反面、生徒からも実にさまざまな言語機能や表現が出てくることになり、評価が煩雑になってしまった。生徒に示したルーブリックでも「オリジナリティがある」という点を高く評価するということがあつてか、こちらの予想を遥かに（いい意味で）裏切るユニークな作品を多数見ることができたが、「活動としては面白いけど、評価が難しい」という声が同僚の先生から上がり、(1)の評価基準の曖昧性も相まって、評価する側である教員を混乱させてしまったと反省した。

また、せつかく4つもモデルを提示できるのだったら、グッドモデルだけにせず、あえて出来の悪いモデルも同じように用意すれば良かった。たとえば「思考・判断・表現」がA評価のモデルと、B評価のモデルを並べて見せれば、生徒たちは自ら「何がこのパフォーマンステストで求められているか」を考え始めただろうし、ルーブリックのイメージが具体化できたと思う。

11. 高校3年生を教えるということの意味

高校3年生は、さまざまな点で「最後の砦」だ。生徒によっては、英語の授業を受けるのが人生で最後かもしれない。語学に触れることが最後かもしれない。多様なテキストに触れるのが最後かもしれない。母語以外の言葉でクラスメイトと言葉をかわすのが最後かもしれない。そんな最後の教室は、楽しくあってほしい。自分自身と向き合うことのできる時間になりたい。そんな気持ちで生徒と授業を作ってきた。

生徒が主体的に考え、ときには立ち止まり、言葉を重ねては他者に届けようとする。それと同じように、私自身も考えることを諦めず、もがきながらも言葉を得ては産み出していくことを続けていきたい。